
血が赤い理由

鯨 千尋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

血が赤い理由

【著者名】

鯨千尋

N9892A

【あらすじ】

中学の技術の時間。僕は誤って怪我をしてしまった。流れ出る血にざわめく教室を後にして、保健室に向かう僕は、付き添いの保健委員から血が赤い理由を知らされることになった。

ツツ。

指先に痛みが走る。一瞬。

何が起こったのか、その指先に目を走らすと、線の切り口から赤黒い液体がツツツと流れ始めている。自らの身に起きた災難を明確に理解した。

痛。

さつきよりも声を張り上げ、痛みを周囲にアピール。
クラス中の視線が僕に集まる。僕はここを見てくれと言わんばかりに手を前に突き出す。

たくさんの視線が僕の顔から肩、腕を伝つて指先に向けられる。ポタリと一滴、赤い雫が机の上に落ちた。
わあっと声が上がり、僕は一躍、時の人となる。

彫刻刀は時に凶器となり、人を襲う。毎日、木ばかり削らされいたら嫌気もさすだろう。僕は彫刻刀の気持ちが痛いほど理解できる。痛いほど。

注意力が不足したヤツの一人や一人、クラスには必ずいる。ただ今回は、注意力不足クラス一位の竹田君を差し置いて、一位の僕が彫刻刀の犠牲になつたという、それだけのこと。彫刻刀を授業で使うと決まった時点での事故は想定の範囲内。僕がクラス代表になつたという、それだけのこと。

やがて周りで大丈夫かいと声が次々に上がつた。僕は指の股をおさえて止血を試みる。

左隣の席の宮本さんがハンカチを渡してくれたけれど、僕はハンカチに描かれたキティちゃんを血みどろにしたくなかった。この年でキティちゃんに嫌われると、後々の人生に多大な影響を及ぼしそうな気がする。直感的にそう判断した。

ハンカチに遅れること五秒、右斜め後ろの座席の森さんから差し出されたティッシュペーパーをいただき、傷口をおさえると、赤色が鈍くにじむ。同時に切り傷の痛みを弱く感じる。

右隣の塙塙君が赤に染まる白を見て痛そうな顔をする。大丈夫。痛いのは僕だ。それに痛みはさほどひどくない。塙塙君に移入された痛みの感情は、僕の感情をはるかに越えている。いや、僕が感じるべき痛みの感情を塙塙君が何割か引き受けてくれたのかもしれない。

先生の提案で保健室へ行くことに。

宮本さんが付き添つと言つ。宮本さんは保健委員。保健室まで急げば徒歩一分。頭痛でフラフラするわけじゃない。足を怪我して歩けないわけじゃない。出血多量で倒れるはずがない。

一人で行けます。

宮本さんお願ひね。

僕の意見は無視かよ。思つてみたところで先生の意見にはかなわない。

それじゃあ行こうか。

仕方ないので僕は立ち上がりつて宮本さんを促す。なぜか僕から誘う形になってしまった。どっちが怪我人だよ。変な感じ。

教室を出ていこうとする。廊下側先頭の座席、後田君がニヤニヤ笑

つていてる。君も保健委員だろ。血おうかと思つたけどやめた。たぶん次の休み時間、後田君は僕と富本さんの仲をひやかすはずだ。まあいいや。

教室を出て、歩き始めるとすぐに富本さんが大丈夫?と聞いてきた。教室で何度もみんなから尋ねられた。もうダメかも、なんて答えたらどんな反応するんだろ。

痛くはない。

そう答えた。正直に今の気持ちを。

三組と四組は体育らしい。教室に人の気配はない。廊下は、はるかかなたの向こうの突き当たりまで、シンと静まり返っている。

ねえ、どうして血は赤色なのか知ってる?

富本さんがよく聞き取れる小声で聞いてきた。なぞなぞ遊びをしたいのか、大喜利をしたいのか、富本さんの表情では判断がつかなかつたが、どちらにせよ、答えは考えつかなかつた。深く考えたわけじゃないけど。

わかんない。

そつけないけどもう答えるしかなかつた。

血は…。

トン、トン。一歩分、足音を強く鳴らす。

田立つように赤いの、田立つために。

確かに黄色だと肌に同化して目立たない。緑だと周囲に同化して目立たない。赤色は目立つ。衝撃の色だ。簡単な答えだな。ただの間を埋めるだけの話題なのかな？宮本さんの真意は掴めない。

血は…。

トン、トン。宮本さんは続ける。

それ自体が意志を持つてるの。流している本人にだけじゃなく、他の人にその人の痛みを伝える。きっと優しいのね。

血が優しい？

そう。とても。

につこり微笑んだ。怪我人を保健室に搬送している人が投げかけているとは思えないくらい、とても素敵な笑顔だった。僕はティッシュペーパーにくるまれた指先を見つめた。

痛くない？

痛くはない。

血が優しい？よくわからなかつた。でも、まあいいや。そもそも僕は、宮本さんという人自身もよくわからないし。

保健室到着。

宮本さんが中まで先導してくれる。保健の先生は慣れた手つきで処置をしてくれた。僕は年に数人訪れる彫刻刀で怪我する、そそつか

しき男子のレッテルを貼られたのかもしれない。

五分で処置完了。富本さんは処置が終わるまで待つていてくれた。迷惑なようで、嬉しいような。嬉しいような？そう、嬉しいような。

帰りは無言だつた。

たまに富本さんの足音が軽く廊下に響く。一歩分セツトで。

トン、トン。

廊下の窓から斜めに射し込む陽の光が、埃をキラキラ舞わせていた。光を受けた床は反射して眩しい。

あつ。

上りの階段で富本さんが軽くつまづいた。

おつとど。

僕は支えた。支えた手の傷口が包帯越しに富本さんの肩に触れた。痛みを感じすぐに手を引く。痛みを感じ？そつ、痛みを感じ。

ごめんなさい。ありがとう。大丈夫？

全然。

包帯を巻いた指が属する手を、開いて閉じて開いて閉じた。富本さんは笑つた。僕は痛みを感じた傷口から血の流れを感じた。つま先から頭の先まで流れる血の流れを。

優しさか…。

ポツリとつぶやいた。思わず。

えつ？

何でもない。

身体中を優しさが流れている。そう思ふと心に安堵感が広がった。

血の痛みを知っている。

血が赤い理由を知っている。

だから。

だから僕は人を殺さない。

(後書き)

最近、ニュースを観ていると、痛ましい事件ばかり目にします。人が人を故意に傷つけない、殺さない。難しいことではないと思うんですけど、ね。血が赤い本当の理由はわかりませんけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9892a/>

血が赤い理由

2010年11月8日09時12分発行